

シベリアの言語を研究しています

藤代 節

神戸市看護大学

Setsu FUJISHIRO

Kobe City College of Nursing,

あまりお友達は多くない方であると思うけれど、割とおしゃべりな質なので、つい、色々なところで、人と話しをすることになる。10代の頃は、勿論、友情や恋の行方について、20代になると、伏せ字というか、暗号化されたフレーズが多用される、まあ言ってみれば、人生の岐路にたったとも言えなくもない年頃でそんな話しも出る。さらに30代あたりになると、なんとなく探りを入れながら、相手の出方を見つつどこまで自己開示するか、させるかに関わる話題に入る、やがて40代、50代になれば、ダイエットと弱る足腰の話になれば、皆一家言あるので、話が盛り上がる。と、そろそろ、そんな話も適当になってきたところに、よくあるのは、そもそも、あんたは何をしているのか？という話題である。

私は1959年生まれで、大学4年の時に事務局に張り出されていた就職の採用情報紙に初任給が男女で1万円ぐらいの差があった（男性の初任給の方が高い）のを、たいして何も思わずに眺めていた世代だった。その一方で、二十歳ぐらいの時だったか、割と気の合う母と言いつつ言い合いになったことがあった。「なんで、年を取った親の面倒を嫁とか、女ばかりが引き受けなくちゃいけないのかな。施設に入れて割り切ったらどうしてその家の女の人が悪く言われるのかな」という話題になった時に、「それは、やっぱり、男の人は働いてお金を稼いでくれるから、女の人がやらなくちゃだめなんじゃない。」「でも、時間の制約があって、ずっと親の介護をしなくちゃならない辛さを女性だけが我慢するのは間違っていると思うけど。私は外で働きた

いな。」「親を施設に入れようなんて、親不孝じゃないの」と母。まあ、そのあたりで話は決裂したけれど、あれから30年ほどして、母は施設にも入り、ほどなく病院で亡くなったが、その境遇に特に不満を持っている様子でもなかった。東海地方の農家から恋愛結婚で結ばれた父と都会（大阪の郊外）に出てきて、サラリーマンの夫を大黒柱とする核家族の専業主婦として生きた。私が小学生の頃から駅前のお菓子屋さんパートに出たが、その頃、学校で、「お母さんが働いている人は立って下さい」と、何の拍子か先生が言った時、40名ほどのクラスで立ち上がった者は3名だけだった。特に何とも思わなかったが、それでも、50年もたとうというのにその光景を覚えているのは、やはり、子供心に印象に残ったということだろう。

話はすっかりそれてしまったが、で、何をしているのか？と問われた時に看護大学で教員をしています、と言いつつ、息をつかずに、専門は看護ではないですけど、と言いつつ訳するように言う。そうでなければ、きっと、「この頃、あそこが痛い、ここが痛い、どうしたらいいのか」の相談が飛んできそうな気配を感じる。「(いったい)何を教えているのか」という問いかけに、「コミュニケーション論などです、専門が言語学なので」と答える。すると、「言語学って、何を研究するのですか。何語ですか？」と暇をもてあましたように聞かれるので、「シベリアの言語です」というと、「シ・ベ・リ・ア！それは珍しい！」となる。あまり、自分の研究のことを業界の仲間以外に説明する機会もなければ、必要も無く過ごしているのが、手

持ちぶさたの時間をつぶす会話では、それなりに相手に興味を持っていただける場合もある。「シベリアの言語って、シベリア語っていうのですか?」と会話が続いていくが、「シベリア語というのではないんですよ」というところあたりから、決して出鱈目を言っただけとはいけないと、何故か、ちょっと真面目になってしまう。「シベリアは、ご存じのようにロシアの国の中にあって・・・」という話からはじめて、やがて、尋ねられてもいないのに、いや、たまには尋ねられることもあるが、どうして、ロシアに興味を持ったか、というところからつい話題にしてしまう。

1970年代に高校生だった世代の人達の中には、自称軟派の文学好きの者が相当数いたのではないだろうか。大阪の吹田の山を切り開いて太陽の塔をたてて臨んだ一大イベントの日本万国博覧会 (EXPO'70) を皮切りにどんどん生活が欧米風に豊かになっていく時代を背景に世の中が移り変わって、今日よりも明日は良くなるとぼんやりと思っていた時代だった。社会のひずみが国外は言うに及ばず、国内にもあちこちに出ていたのは今と何も変わらないが、生活が日々便利で、当時の感覚でいうと「洋風におしゃれ」になって行った時代だった。私を含む若者達の大半は海外、特に欧米にあこがれ、大人になってからの自分の行動範囲が広がることを漠然と望んで、また根拠もなくそうなるだろうと確信していたのではないだろうか。

会話にもどると、「へー、どうしてロシア語やろうと思ったんですか?」と尋ねられ、ちょっとめんどくさいな、と思いながら、「ロシア文学が好きだったので・・・」と答えると、そこから先は、たとえ、ロシア文学研究を目指したことがあっても、所詮文学がよくわからない身としては、話はずむことはないので、先の問題に戻って「で、結局、文学の才能はないなと自分であっさり分かったので、語学の方へ進みました」と、情けない話になっていく。人の古傷に触ってはいけないというか、まあ、スルーしてくれた相手は、「ロシア語とシベリア語って、違うのですか?」という次の質問を投げかけてくれるだろう、多分。

そこから、ロシア語圏の言語事情を説明することになっていく。相手の年齢にも依るが、20世紀の旧ソ連邦をめぐるおおまかな歴史を必要におうじて話題にしながら、おしゃべりが続いていく。「ロシア語って英語とだいぶ違いますか?」「ええ、文字が結構ローマ字と違いますし、何しろ語形変化が多くて覚える

のが大変です」とか話しながら、自らもロシアに対して抱いているイメージをおさらいする。「ロシアって、ちょっと前までソ連でしたよねえ」という感じで。1917年にレーニンを核として10月社会主義大革命が当時の帝政ロシアで勃発し、その後、1922年に成立したソビエト社会主義共和国連邦 (略してソ連) が1991年に15共和国の相次ぐ独立を背景に崩壊した。15共和国の中で最大の共和国であったロシア社会主義共和国が、社会主義国からその体制を変換し、今日のロシア連邦となった (P.64地図参照)。人口でおおざっぱに言えば、2億8000万人ぐらいいたソ連人が連邦崩壊後のロシア連邦の人口としては、1億4000万人ぐらいになったからだいぶ縮小したと言える。ロシアは、20世紀初頭までは帝政であり、ユーラシア大陸北部の広大な地域を占める多民族国家であった。日本の学校で学習する帝政ロシアの東方進出やピョートル大帝、エカテリーナ2世、大黒屋光太夫、ちょっと飛ぶけれど、シベリア出兵、シベリア抑留、考えてみれば、シベリアは隣国の領土なので、たとえ明るい物語が紡げるとは限らなくても、日本との関わりもそれなりにある。しかし、1970年代に学校生活を送った私達には、たまにシベリア鉄道に旅情をそそられることがあっても所詮は遠い国の、更に辺境だった。

ロシア語から、また話が脱線してしまったが、その旧ソ連邦全域で、また現在のロシア全土で通じる言語がロシア語である。で、シベリアには、シベリア語という言語はない。あるのは、実に多様な先住民族の言語である。そもそも、日本で生活していると、国語といえば、大抵の日本人にとっては日本語のことだとあらためて意識することも皆無であると言ってよいだろう。日本語研究者の集まりである日本語学会も1944年の創設当時から、2004年に日本語学会と改称するまでは国語学会と称していた。日本語は日本国の言語、中国語は中国の言語、ロシアの言語だからロシア語、何の問題もなし。しかし、どうして、ソ連語って言わないのだろうか、とふと思うことがかつてなかっただろうか。帝政ロシア時代もロシア語がもっぱら使われていたのだから、ロシアの言語はロシア語なのだろうな、と思えば、まあ、そんなに問題でもない。前からの引き続きでロシア語って言うのだろうか、と思う。しかし、よく考えたら、そもそも国と言語の関係というのは様々なケースが考えられるはずなのである。だから、特に意図しない限り、自らが自由に日常生活その他で

使用する能力のある言語、ネイティブ・ランゲージを母国語とは言わずに母語というのである。日本国だって決して単一言語の国ではない。

それで、ロシア語であるが、どうしてソ連語と言わないのだろうか、という問には、実はソビエト政権下にあったソ連邦で、ロシア語をもっぱら母語とする人々は、およそ7割程度であったという点から説明したい。ロシア語を少なくとも第1の母語としない人々は、各地域でそれぞれ伝統的に周囲の使用する言語としてロシア語以外の言語を習得してきた。文字通り、ソ連邦が15の社会主義共和国の連邦であったことを思えば、現在は独立国として、オリンピックなどで国名として親しんでいるウクライナ、アルメニア、グルジア、リトアニア、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン等、それぞれ、かつてソ連邦の中で共和国を形成していた国では、その国の名称を冠した言語があり、程度の差はあるものの、ロシア語とともに公用語として広く使われていたとしても当然である。もっとも、各共和国内では、さらに自治共和国や自治州があり、その中にはさらにいくつかの民族言語があり、それら民族言語は必ずしもまとまった地域で話されているとも限らず・・・という具合で、実は、ソ連邦では、およそ130の言語が使用されているとされていた。と言うわけで、ロシア語はソ連語ではなく、あくまでもロシア語であった。ソビエト政権下では、ロシア語は、国際語ならぬ民族際語というとらえ方をされており、どの地域のソ連市民もその習得が当然視されていた。ソ連邦崩壊後の現在は、特にEUに加盟したバルト三国（エストニア、リトアニア、ラトビア）では、ロシア語不 사용을推奨し、現在ではロシア語にはかつてのような勢力は全くない。また、トランスコーカサス地方、つまり、黒海とカスピ海を結ぶ地域の国、即ち、グルジア（グルジア（Gruzija）というのはロシア語読みで、これを嫌ったグルジア国が、英語読みのGeorgia ジョージアと名称を変更するように国際社会に訴えたのは記憶に新しい。ちなみに、グルジア人の自称は、あえて日本語読みすれば、サカルトペロである）、アルメニア、アゼルバイジャンの三国にはそれぞれ国名を冠した言語があり、それが各国の主要な言語となっている。このトランスコーカサス地方は山岳少数民族をはじめとする多民族地域で、言語の系統が不明のものも含め、多くの言語が使用されている地域でもある。

スラブ系言語として、言語系統的にもロシア語に近いウクライナ語や白ロシア語を国語とするウクライナや白ロシアでもロシア語はやはり近年では、かつてのような勢力は無い。これらの共和国では、英語がだいぶ普及してきたとはいえ、日本の報道で取り上げられる記者達の現地取材映像では、ロシア語がまだ幅をきかせている。また、少し東よりの、所謂中央アジアのカザフスタン、キルギスタンなどでは、言語的にトルコ共和国の主要言語であるトルコ語に近いカザフ語やキルギス語がやはり主要言語として話されている。これら中央アジアの国でもかつては、エリート達がモスクワ大学をはじめとする首都圏の大学を目指し、当然、ロシア語との、少なくともバイリンガルである必要があった。現在でも、かつてのロシアとの関係によって言語の併存のあり方に異なりはあるが、ロシア語は、これらの共和国間の共通語としても、また、かつての西側の国々との共通語としても決して使用範囲は小さくはない。テレビ放送やラジオ放送もロシア語の番組が日常的に放送されていること、また、ソ連時代の学術研究書などには、ロシア語で著された膨大な文献があることも無視出来ない。

と、すっかり、ソ連邦とロシア語との関係を語ってしまったが、肝心のシベリアはどうなっているのか、というと、ウラル山脈以東のシベリアには、ソ連邦崩壊に際して独立国家となった共和国はない。ピョートル大帝が17世紀にシベリア地域への進出を促進した頃より以前から、東方進出、シベリアへの領土拡大は歴代皇帝により活発に行われてきた。1648年にデジネフがユーラシア大陸のはずれに達し、その後、1741年に北米大陸アラスカ地方を版図に納め、1867年にアラスカをアメリカに売却する頃には、ユーラシア大陸の先住民を帝政ロシア政府の経済システムに着実に組み込んでいた。交通の要衝を押さえ、シベリアの各地にヨーロッパロシア側からの官吏やこれと結託して莫大な利益を上げた商人等やロシア正教布教のために教会から強力なバックアップのもとに投入された聖職者達がネットワークを形成していた。ロシアが列強として勢力を拡大していく中で当時鎖国状態であった日本との接触も、大黒屋光太夫のエピソードに見ることができる。伊勢の船頭大黒屋光太夫は、カムチャッカ沖に漂着した後、中央政府とつながる役人等の協力を得て、ユーラシア大陸を横断し、1792年に帝都ペテルブルグへ向かい、エカテリーナ2世に謁見する。当時、東方

地図 (Central Intelligence Agency World Factbookより) ロシア連邦地図



現在の首都：モスクワ；帝政ロシア時代首都：サンクトペテルブルグ；ヤクート(サハ)語の使用域：東シベリアのレナ川中流域ヤクーツクを中心とする広大なヤクートサハ共和国(ロシア連邦内の共和国)；ドルガン語の使用域：ロシア中央部を流れるエニセイ川河口右岸域の北極圏で地図上のノリリスク付近よりも北東の地域；一般にウラル山脈から東方をシベリアという。

への野心を持っていたロシアは、光太夫に帰国を許すとともにアダム・ラックスマンを通商条約締結のために日本に遣わす。この大黒屋光太夫から江戸幕府の御用学者桂川甫周が聞き書きした記録が『北槎聞略』として、残されている。この中でヤコトやトングス、ブラツケという民族名で記載されているのが、シベリアの少数民族のヤクート(サハ)人、ツングース人、ブリヤート人に当たる。光太夫は、交通の要所で馬、時にトナカイを替えながらロシア人官吏等に伴われて旅をしていく。オホーツク(地図にある極東のマガダンよりもやや南の街)、レナ川中流のヤクーツク、バイカル湖沿岸のイルクーツク、ウラル山脈の東側すぐのエカテリンブルグ、ボルガ河畔のカザン、ニジニイ・ノブゴロドを通過し、やがてモスクワ、そして当時の都ペテルブルグへとシベリア横断の旅をしていく。おそらく18世紀末の少数民族の姿を正確に記述しているとみていいであろう。

で、なかなか、言語学の話にたどり着かないが、かつて社会主義という我が国とは異なる社会体制の厚い鉄のカーテンが閉められていたように感じるソ連邦であった(あちらでもそう思っていた可能性もあるが)。70年代も後半に入って、その頃から大学生にも海外旅行に手が届くような日本社会となり、パスポートを取

得して海外へ出かけていくクラスメート達がしきりに手に取るパンフレットは、大学でロシア語を専攻していても、アメリカ、ヨーロッパ行きのパンフレットだった。社会体制が異なるし、ソ連って、何だか得地のしれない、まあ、大学で勉強しているからラテンアルファベットとは異なる文字はもう読めるようになったけど、バイトを重ねて貯めたお金で出かけたいと一同が思う国では、決してなかった。そんな70年代が過ぎ、80年代の半ばにゴルバチョフが共産党の書記長になったころから、ペレストロイカだ、グラスノスチ(透明性)だ、とソ連の情勢も変わった。その後、程なくソ連邦が崩壊し、その前後から学術交流のカーテンも一気に開いた感がある。

ロシア語を専攻したものの、現代ロシア語文法をがっちり身につけ損なった私は、現代ロシア語の研究にあまり、興味を持てなかった。英語圏の人文学分野と比べて、鉄のカーテンのせい、あまり日露間での学術交流も活発であったとも言い難く、おしゃべりは好きなくせに、ロシア語会話になると急に口ごもるタイプの私は、現代語の研究にむいていないと勝手に思い込んだ(実際には、きちんと文法を押さえて、語る内容が重要なのであって、ブローケンで口ごもるのでは、別にどの分野の研究をしても困難を抱えること

に変わりはない)。やがて、言語が変わっていくこと、言語変容に漠然と興味をもつようになった。ロシア語だけではなく、ロシア語圏で話されている別の言語に興味に向くようになっていった。ロシア語で優等でなかったのを、別の言語で挽回しようと思った訳でもないが、おしゃべりで、人との接触到躊躇があまりない性格であることもあってか、そうだ、言語の接触の点から、言語変容を考えてみるのはどうだろうか、面白いのではないか、ブローケンでも、ロシア語という武器があるし、そもそも、ブローケンでも言葉の壁を何とかしようとおもう気持ちから、きっと、かつてのシベリアの人々は、ロシア人と、また、その他の自らとは異なる系統の言語を話す人々と意志の疎通を図ることが出来たのではないかしら。

という訳で、現在は、シベリアの少数民族言語の中のチュルク系言語であるヤクート語（サハ語とも言う。話者人口は45万人程度）や、更に小言語であるヤクート語から分岐したドルガン語の研究をしている。これらの言語は、中央アジアの諸国の主要言語として上に述べたチュルク系諸語と同系統である。どのようにして、遠くシベリアの地にチュルク系言語話者がたどり着いたのか、シベリアに至るまでに、ツングース系言語やモンゴル系言語とも接触している痕跡らしきものが文法や語彙に見いだせることもある。

シベリアの言語には、これらの、チュルク、ツングース、モンゴル諸語を集めた言語の一大グループとしてアルタイ諸語と称される諸言語や、フィンランド語などと同系統のウラル系諸言語やサモエド系諸言語、また、古シベリア諸語と称されて、文字通り、様々な言語話者がシベリアの地に到着する以前にこの地に先住していた人々の言語もある。例えば、ユカギール語、ニブフ語、イテリメン語、エスキモー語等々、言語系統的には不明の言語群も分布している。そして、その全体に大言語としてソ連邦時代のロシア語教育を背景にロシア語が併用状態をなしている。少数とはいえ45万人の話者数を持ち、かつてソ連邦内でヤクート社会主義自治共和国の主要言語であったヤクート語を除くとシベリアの言語は、軒並み勢力を失い、その存続が危うくなっている。言語を研究する者としては、話者自らがその言語の保持を望む限り、言語が保持されて欲しいと思うが、今やシベリアの少数民族言語の大半は看取りの段階にある。

言語学研究の分野では、20世紀末から、ロシア語圏

に限らず少数民族言語研究が盛んになり、消滅の危機に瀕している言語データの記録ということに大変なエネルギーが割かれて来た。また、言語復興の試みも一部ではされてきた。しかし、私がかここ数年主な研究対象としてきた極北の小言語ドルガン語は「瀕死」の状態にあり、この言語を如何に看取っていくかという段階に、達している。ソ連邦崩壊により、それまでのトナカイ飼育や狩猟などの地場産業への国家からのサポートがなくなった後、1世代ほどの短期間に急速に民族言語の使用が衰え、大言語に言語コミュニティが移行している。言語の消滅を目の当たりにして、その消滅は具体的にどこからどのように始まるのか、そして、どうやって最期を迎えるのか、そこに在るメカニズムを言語生態の中で探ることを近年のテーマとしている。

看護大学にいるから、「看取り」ということを意識し出したのかもしれない。短絡的に過ぎるような気もするが、言語は変容することは避けられない。何をきっかけに言語が使われなくなっていくのか、どのようなプロセスを通過していくのか、冷静にその言語の最期を看取することも言語研究の対象となってもいいのではないかと考えている。一方で、人間の方が死に瀕した時に使用する言語のあり方についても、興味は尽きず、現在、大言語であるロシア語と民族言語のバイリンガルの話者は人を看取る時あるいは看取られる時にどのように言語を切り替えているのか、その切り替えの動機は、やはり消滅していく言語を看取る上で大きなヒントを与えてくれるのではないかと期待している。

